



第1章

農政改革

成長か衰退か、岐路に立つ農業

伊藤隆敏¹⁾ 本間正義

●優秀で勤勉な農業者がおり、豊かな農業資源があるにもかかわらず、日本の農業が衰退の一途をたどっている。それは、人と資源の能力を発揮する道を、誤った政策で閉ざしているからである。

●コメの生産調整（減反）は全廃が望ましい。平均米価は下落するが、生産者努力で付加価値の高いコメづくり、土地集約によるコスト削減が進めば、コメ産業は、輸出も視野に入れた産業に育つだろう。これにより自給率は高まり、納税者の多大な負担に基づく政策的支援は不要となる。

●土地が狭い日本では、努力しても高コスト構造は変わらないといわれているが、一戸あたりの作付け規模を拡大すると確実にコストは下がる。一方で、高齢などの理由により、埼玉県全体の面積とほぼ同等の農地が全国にわたって利用されていないのが現状である。農地の権利移動の制限をなくし、土地の集約化を図ることが大切。

●農協にとっては組合員数の維持と多種多様な事業の利用額の増大が望ましいが、これは農家の大規模化・効率化に反する。規模拡大が進めば農家の数は減り、大規模化した農家は農協を利用しなくなるかもしれない。農協に市場競争を持ち込むことが求められる。